古墳築造の尺度

新井　宏

古学、計量史　一九三七年、東京都生まれ。元日本金属工業常務。工学博士。

一尺＝26.7センチ

古韓尺がピタリ一致

― 朝鮮半島と共通 ―

古墳はどのような尺度を用いて築かれていたのだろう。その研究については未だに百家争鳴の様相を呈している。

古墳時代の尺度を理解するには、律令制直前の尺度を究明するのが早道なのではないか。そう考えて取り組んだのが、古代寺院や宮殿建築の尺度研究だった。

その結果、現存する法隆寺や法起寺をはじめ、飛鳥・白鳳期の寺院、そして高句麗の安鶴宮、新羅の皇龍寺、百済の益山弥勒寺などの建築群が、すべて一尺＝二十六・七㌢前後を示したのである。筆者は、この尺度に古韓尺と名付け『まぼろしの古代尺』（吉川弘文館）として平成四年に発表した。

数値的には実によく合うが、さらに信憑性を高めるためには、文献的な裏付けが欲しい。鍵は韓国にあるのではないか。会社役員を退任したのを機に、韓国で専門の金属工学を教えながら、尺度の研究を続けた。

狙いは見事に的中した。古韓尺の存在を、新羅王京に関する文献と発掘の対比や、朝鮮半島の結負制研究などから、文献的にも明らかにできた。

統的な農地制のことで、田の面積の基本単位を「束」とし、一結＝千束、一負＝十束という換算で近代まで続いた。この制度について、筆者は金石文などの文献研究から、十結が一井に相当することを発見。古代結負制の単位が大きい方から井、結、口、負、束、把の順に十進系を採っていたことを明らかにした。

一井は一里四方のことで、一里＝三百歩であるから面積は九万平方歩となり、一束は九平方歩となる。その結果、面積が一束の田の一辺の長さである「量田歩」は三歩となり、高麗期（十一世紀ごろ）の記録と一致した。

しかもここに使用された歩は、古韓尺によることも明らかにできた。古韓尺は一尺＝二十六・七㌢なので、古韓歩（六尺）は一・六〇㍍、量田歩（三歩）は四・八〇㍍で、一束は二十三・〇平方㍍ということになる。

この結果、驚くべき事実が判明した。律令制度以前の土地制度である日本の「代」制でも一束代の面積が、ちょうど二十三・〇平方㍍だったのである。それは、後に採用された律令期わかった。

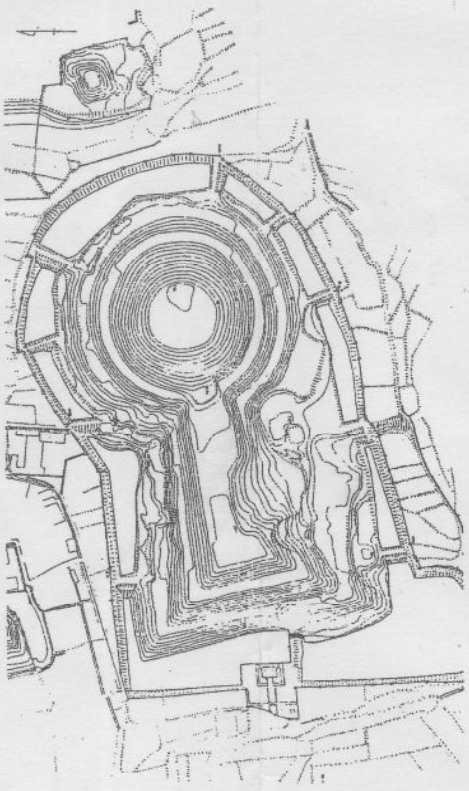
しかも「束」代、「把」代という名称まで、完全に日韓で共通している。古代の土地制度が日韓で同一であったことは、もはや疑いがない。

ここに至って、研究は再び、古墳の尺度に回帰する。古墳も古韓歩と量田歩で設計されていたのではないか。そんな予想を立てて資料をあたっていたら、さらにびっくりする論文に出会った。

梅澤重昭・元群馬大学教授が、群馬県の前方後円墳の尺度について「その公約数から帰納すれば、（晋尺）二十尺すなわち四・八〇㍍であろうと推定している……この基準尺度は、一尋を一・六〇㍍とした場合の三尋すなわち四・八〇㍍の可能性もある」と述べられているではないか。梅澤氏の結論は、寸法的には代制や結負制のシステムに完全に一致していたのである。

あとは一本道であった。発掘調査を経て正確な測量が行われた古墳については、群馬県内ばかりでなく、南関東最大の内裏塚古墳（千葉県）や、東北最大の雷神山古墳（宮城県）、兵庫県最大の五色塚古墳などもぴったり一致する。

未発掘の超大型前方後円墳についても、仁徳陵古墳（百歩）、応神陵古墳（九十歩）、履中陵古墳、造山古墳（七十五歩）、景行陵古墳、土師ニサンザイ古墳、作山古墳、仲津媛陵古墳（六十歩）など、量田歩を用いれば、九〇㍍以上の古墳が二・五㍍以内の誤差に収まることが確認できた。

これら超大型前方後円墳は晋尺（二十四㌢）の二千尺、千五百尺などに一致するという説が、従来の有力な見解であった。しかし、後円部が約百六十㍍の箸墓古墳や見瀬丸山古墳などは、晋尺では六百六十―七十尺となって、完数とはならないのに対し、古韓歩であれば、ちょうど百歩という完数を得られる。

ここに、古墳の築造は古韓尺を媒体とした尺度で行われたことが証明できたのではないか。この事実が、どのような意味を持つのかは今後の検討課題である。